小宮収穫余禄 桜苗木に花芽つく

ふくしま再生短信 2015 10/13（第6号）

【カット写真（左上から時計回り）】作業中の金一さん、稲穂の生育状況を確認する金一さん、マキバノハナゾノ桜の植樹会（2014/4/13）、桜苗木についた花芽、４株の稲刈り、稲束の結わえ方を手解きする金一さん 【背景写真】<はせがけ>を終えた飯舘村小宮の大久保金一農園田圃風景・中央矢印は東大大学院農学生命科学研究科国際情報農学研究室教授溝口勝さんのフィールドモニタリングシステム（撮影日は桜の植樹会を除き2015/10/11）

金一さん

大久保金一農園ならびにマキバノハナゾノ主人。十歳でハナゾノづくりを始めて六十余年、昨年は*4/13*・*4/20*両日にわたり桜の植樹会を主宰。再生の会が協力し、大学生ら*100*余名が参加して*100*本以上の苗木を植樹、*2017*年に第１回花見を予定。

2015年10月11日午前11時、飯舘村小宮地区の大久保金一農園を訪ねた。当初は記者としてこの日小宮の作付実験田圃の稲刈りに参加する予定だった。飯舘村に到着してみると日曜日は雨天との天気予報のため急遽土曜日10日に稲刈りは「終えた」という。しかし失望するのは早過ぎた。なんと４株がこの日のために残されていたのだ。

金一さんはトラクターで資材運搬の作業中であった。４株の存在に不安を抱きつつ稲刈りの準備に入っていただいた。記者を含めて２名で４株の稲刈り、超贅沢というほかはない。稲刈り、稲束結わえ、そして<はせがけ>まで金一さんの指導のもとで貫徹できた。

めでたく収穫を終えた直後にでっかいニュースが飛び込んできた。１本の桜の苗木に花芽がついたのだ。来春の開花が楽しみだ。

（撮影・文責：若林一平）

【菅野宗夫撮影「虹の架け橋」：2014年11月3日12時00分 福島市岡部地内 阿武隈川文知摺橋中央（国道115号）から北を望む】

農林畜産業の再生へ

2015年10月14日16時から東大弥生講堂アネックスでふくしま再生の会第９回報告会「農林畜産業の再生をめざして」が、東大農学生命科学研究科アグリコクーン農における放射能影響FGおよび東大福島復興農業工学会議の共催により開催された。冒頭東大大学院農学生命科学研究科長・農学部長・丹下健さんから復興再生の課題解決に大学をあげて取り組むとの挨拶があった（写真右上）。◆副理事長の大永貴規さんの司会で最初に理事長の田尾陽一さんから「ふくしま再生の会とは／その活動の全体像」の報告があった。「共感と協働」を基本とする再生の会の活動のもとで、産業と生活の再生、放射能・放射線の把握、各行政地区での住民との協働、人材などの協働ネットワークへの取組みが報告され、最後に会の体制の説明があった。

飯舘村から

（上の写真左から）菅野永徳（ながのり）、山田猛史（たけし）、菅野宗夫（むねお）、の３氏が参加した。山津見神社氏子総代の永徳さんは焼失したオオカミ天井絵の復元が和歌山大・東京藝大の協力で完成したと報告した。

◆2人目の溝口勝さん（再生の会副理事長・東大福島復興農業工学会議）は「飯舘村の農業再生の構想」と題して飯舘村から新しい日本の農業を創造すべきとし特に若い担い手の育成に専門の垣根を越えて取り組む例として飯舘のハウス野菜のケーキに挑戦したフェリス女学院大生が紹介された（写真右）。◆3人目の菅野宗夫さん（再生の会副理事長・飯舘村農業委員会会長）は「4年7か月が過ぎた今の飯舘村のすがた」という題で報告した。村の800haの水田のうち300ha強の優良農地が仮々置場と化している現実の中で、山津見神社再建、３棟のハウス栽培、関根松塚の山田猛史牧場の営農再開が進んでいく。生きがいの感じられる「虹の架け橋」の向こうに向かって。◆4人目の山田猛史さん（関根松塚地区復興委員長）は関根松塚地区での水田放牧営農再開に向けて課題と心境を語った。昨2014年10月に避難先の白河近郊の中島村から飯舘の西隣の飯野町に牛を連れて越してきた。幸い高級牛肉の需要は旺盛である。「やってみせる」を現場で実証したい。飯舘での放牧も3年続ければ将来が見えてくる。試食もよろしく。但しあまり若い牛は提供できないけれど（会場爆笑）。◆4人の報告の後討議に入り、森林資源、農家の生産意欲、生きがいのための米作り、山こそ自然の恵みの源泉、などについてパネリストを交えて活発な討議が行われた（写真左）。（撮影・文責：若林一平）

詳細は再生の会HP：http://www.fukushima-saisei.jp

上野英三郎博士とハチ公

報告会が行われた弥生講堂アネックス前に本年3月8日「上野英三郎博士とハチ公」のブロンズ像が建った。「秋田犬のハチは大館市に生まれ、生後50日で東京帝大農学部の上野英三郎博士（農業工学・農業土木学）に贈られた」（ブロンズ像銘板より抜粋）。上野博士が亡くなってから90年ぶりの再会を果たしハチは心の故郷（ふるさと）に帰ってきた。復興の農業工学を提唱する溝口勝さんによると、不毛の大地を肥沃な農地に変える上野博士の農学思想は飯舘村の復興再生の思想そのものにほかならない。

蘇るオオカミ

和歌山大学・東京藝術大学研究陣が協力

ふくしま再生短信 2015 11/10（第8号）

【カット写真（左上から時計回り）】復元されたオオカミ天井絵の実例１、同２、同３、復元を指導した東京藝大准教授・荒井経さん、大学院生らの報告、山津見神社氏子総代・菅野永徳さん、和歌山大教授・加藤久美さん（左）と同助教・サイモン・ワーンさん。【背景写真】焼失前のオオカミ絵写真集（手前）と復元した天井絵。

加藤久美さん

和歌山大学観光学部地域再生学科教授（副学部長）の久美さんは、2012年の暮れ「保存状態がよくない」という山津見神社宮司夫人の懸念を聞き、サイモン・ワーンさん（同学部特任助教）の撮影協力を得て全237枚のオオカミ天井絵のデジタル記録に取り組んだ。2013年春、写真集完成直後に神社が全焼し天井絵を気遣っていた夫人もこのとき亡くなった。

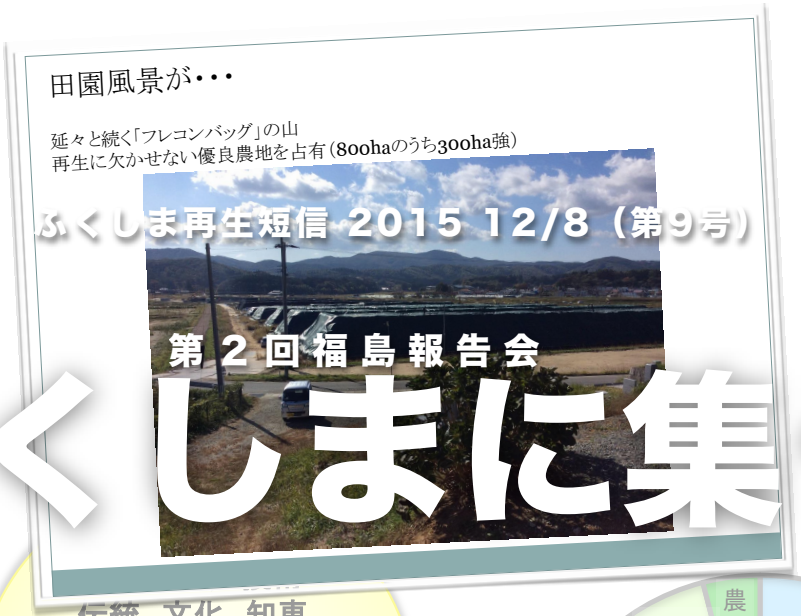
2015年10月24日午後1時30分、東京藝術大学で「山津見神社オオカミ天井絵復元・完成記念フォーラム」が同大学大学院文化財保存学保存修復日本画研究室・准教授荒井経さんの企画により開催された。

フォーラムの冒頭「プロジェクトの背景と趣旨」の報告で加藤久美さんはサイモン・ワーンさんと共に、本事業は三井物産環境基金の助成を得、NPO法人「ふくしま再生の会」、佐須地区の皆様の協力を得て進めてきたこと、オオカミ絵の復元は百年後の未来を創造する事業であると述べた。続いて荒井経さんは、オオカミ天井絵は信仰の継承としての民俗文化財であり人とオオカミが共に生きる営みの継承が基本、まず100枚の復元が成り、続いて残り140枚の復元を進めると述べた。

再生の会理事・事務局長二宮克彦さん「福島の今・現状と今後について」、藝大大学院生のみなさんほか「作品紹介と制作者による解説・コメント」、村田歴史みらい館副参事石黒伸一朗さん「地域文化と保存の意義」，などの報告のあと山津見神社の氏子総代・菅野永徳さんから「奉納していただく一枚一枚の天井絵に感動があります」と心からの謝意が表明された。

会場には嘗て山津見神社の禰宜さんを勤めていた久米順之さん（寒川町観光協会事務局長）が駆けつけて復元事業へ静かな声援を送っていた。

（撮影・文責：若林一平）

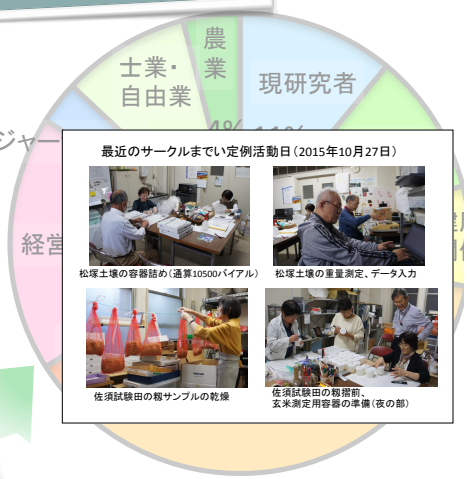


ふくしまに集う

再生への道

職業経験／専門知識・技術
柔軟な対応
きめ細かいケア

伝統、文化、知恵
村民
分断を乗り越える協働が必要
いいたて協働社

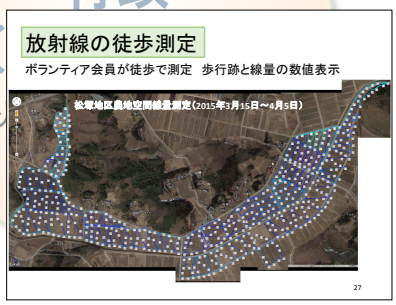


共感と協働

ふくしま再生の会

専門知識・技術
大学・研究機関

公共サービス
行政



【人物写真（左上から）】飯舘電力社長・小林稔さん、山田牧場主人・山田猛史さん、元福島県知事・佐藤栄佐久さん【発表スライド写真（上から時計回り】それぞれ再生の会・宗夫、伊井、小原、中町、溝口、のみなさんの報告資料【背景スライド】田尾さんの報告資料から。

2015年11月6日午後4時から福島県庁南再エネビル３階でふくしま再生の会第２回福島報告会「 福島・飯舘村の再生に向けて」がふくしま再生の会主催・飯舘電力株式会社後援により開催された。再エネビルとは「福島県再生可能エネルギー合同ビル」のことで、現在同ビル２階に再生の会福島事務所をおいている。

飯舘電力・小林稔社長、再生の会副理事長・菅野宗夫さんからの冒頭挨拶のあと、復興庁青木次長、再生の会への委託事業を実施している飯舘村役場の中川喜昭課長の挨拶に続いて、元知事の佐藤栄佐久さんから励ましの言葉があった。

報告は「ふくしま再生の会とは何か/その全体像（理事長・田尾陽一）」「飯舘村の現状と再生への課題（副理事長・菅野宗夫）」「飯舘村の農業再生の構想 （副理事長・溝口勝）」「モニタリング活動についての報告 「地域の放射線・放射能の状況をつかむ」（理事・小原壮二）」「放射能分析チーム、サークルまでいの活動（理事・伊井一夫）」「「健康・医療ケアチーム」の報告 （理事・中町芙佐子）」の６テーマについて行われた。報告に続いて山田猛史さんからは自身が「営農再開の先駆けになる」「後継者に安心できる親の姿を見せたい」「再生の会との協働に希望あり」との発言があった。会場との密度の高い討議のあと懇親会に移行した。

（撮影・文責：若林一平）

ふくしま 再生短信

2015 12/29 第10号

【空撮は吉澤匡さん】9月20日比曽地区を望む。右下に「仮仮置き場」が展開。点在する小さな森は居久根（いぐね）。

比曽の大地と空と

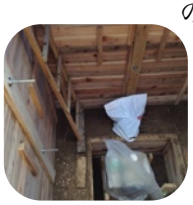
啓一さん

つくばのKEK（高エネルギー加速器研究機構）提供のDIS 線量計を設置した自宅内で語る比曽地区の菅野啓一さん（写真上）は自宅裏の居久根の除染実験、またキャタピラの大型重機を駆使して水田の除染にも取り組む行動の人である。

2015年9月20日、この日ふくしま再生の会のメンバーは菅野啓一さんと協働して比曽地区の環境モニタリングのためにDIS線量計設置作業を実施した。啓一さんの居宅内、居久根、ハウス、氏神様参道、水田、などに設置した（上の写真は居久根の作業、左が啓一さん）。啓一さんは「現在の国のやり方では放射線量は下がらない」と言う。しかし長期的には除染の実現のために国の支援が絶対に必要だからこそ自ら信頼出来るデータの裏付けをとって国と交渉をしたい。この日、啓一さんの強い希望で再生の会メンバー・吉澤匡さんによる空撮が行われた。

12月5日、啓一さん再訪。比曽は早くも銀世界。「空撮の目的は比曽地区の今を後世の人たちに伝えることである。居久根は農家の退職金・宝である。第２次実験小屋は居久根の影響を調べることで環境省への圧力になる。花の栽培で世界の人を集めたい」と啓一さんは言う。

（文責＆空撮を除く撮影・若林一平）



【実験小屋の写真（左から）】基礎工事（11/7）、完成した小屋の外観（12/5）、小屋の内部（12/5）

再生の会・第２次実験小屋

第１次実験小屋は佐須地区に設営され、放射線の土壌遮蔽や木材の活用に向けて、貴重なデータを取得した後に解体、比曽地区に第２次実験小屋を新設した。詳細は「ふくしま再生の会・facebook」へ：https://www.facebook.com/FukushimaSaisei